

Kはなぜ死んだのか  
—— 漱石『こころ』再論 ——

山内春光

社会倫理思想研究室

Why did K Commit Suicide? :  
Reconsideration of Soseki Natsume's *Kokoro*

Harumitsu YAMAUCHI

Ethics

Abstract

Together with some other questions, the question why K committed suicide in *Kokoro* was picked up in my previous essay (1999), but the argument was not sufficient. This essay discusses again the problem along with Japanese ethical thoughts. K killed himself as a martyr to the Amitabha worship, and it was the worship to which his family had been faithful.

要 旨

漱石『こころ』のKはなぜ自殺したのかという問題は、以前の拙稿（1999年）で、他のいくつかの問いと共にとりあげたことがあったが、そこでの議論は不十分であった。本稿はこの問題を、日本倫理思想史の全体にてらして再考する。Kは真宗の教義としての阿弥陀崇拝に、殉ずる形で死んだのではなかったろうか。それは、まさに彼の生家の宗旨として信仰され続けていたものでもあった。

はじめに

本稿は、拙稿「倫理思想研究と社会情報学—漱石『こころ』・三人の自殺を事例として—」<sup>(1)</sup>の後半で取り上げた、乃木・K・先生という漱石『こころ』<sup>(2)</sup>における三人の自殺者の問題の内、とくにKに

ついて、その死はなぜであったのかを再考しようとするものである。再考という論の性格上、資料の扱い方等で重複する部分もあるが、内容的には前稿よりも大きく前進し得ており、その意味では新たな論考と呼んで差し支えないものとなり得ていると考えている。

ただそうは言っても、たとえそれがどんな形であれ人が自殺をするという、そのそれぞれの理由について、明快な説明が可能だなどと考えるとすれば、そのこと自体がそもそも人として不遜な思い込みだとも言うべきであろう。そうした思いを一方で抱えながらも、ここでは、Kの生と死について記述する唯一の手がかりである先生の遺書を主な材料として、Kの生い立ちから死に至るまでをできる限り丁寧にたどり直す作業を通じて、いくらかでもその死の真相に近づくことを試みたいと考える。

## 一 松本氏の西枕説

さてKの生涯をたどり直す作業に入る前に、Kの自殺はなぜあの時に・あの場所で・あのような形で決行されたのかについて、さしあたりまずこの第一節において、思いをめぐらせておくことにしたい。

先生の遺書は、Kの死に直接ふれる最初の一節を次のように書き出している。

私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日<sup>あくるひ</sup>まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すと慄然とします。何時も東枕で寐る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れませんが、私は枕元から吹き込む寒い風で不図眼を覚めたのです。見ると、何時も立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、この間の晩と同じ位<sup>あ</sup>開いています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿は其所には立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に<sup>ひじ</sup>腕を突いて起き上りながら、きつとKの室を覗<sup>のぞ</sup>きました。洋燈<sup>ランプ</sup>が暗く点っているのです。それで床も敷いてあるのです。然し掛蒲団は跳返されたように裾<sup>すそ</sup>の方に重なり合っているのです。そうしてK自身は向うむきに突ッ伏しているのです。(下一四十八)<sup>(3)</sup>

このように記される「Kの自殺の仕方」について、鶴田欣也氏は、「死によって自分の問題の解決をはかるのであれば、後年先生が行なったように誰にも知れず家を出て自殺してもよかつたはずである。そうすれば周囲の人々に迷惑をかけることもなく、望みを達することができたのではないだろうか。それとも、Kの性格上自分のことに夢中で、先生どころか、自殺者を出した家というまことに迷惑な問題を押しつけられる静の母のことなど考えもしなかつたのだろうか。それとも、そういうことも十分承知の上の自殺なのだろうか。後者だとすると、失恋の面当てのようにもとれる死に方である」と述べて、Kにおける「感受性の欠如」を指摘<sup>(4)</sup>している。

実は筆者も、鶴田氏のこの批判はたしかに当たっている面がある、と長い間考えていた。単に自殺す

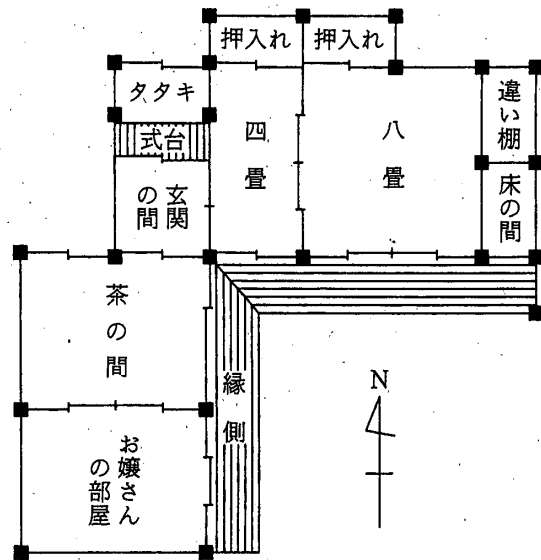
るためであれば、何もこの時に・この場所で・このような形で決行しなくてもよかったのではないか。この時点で、このような仕方死ぬことに、特段の理由がなかったとしたら、Kの自殺はたしかに「失恋の面当て」と取られても仕方のない面がある、とそうのように思っていた。ところが、こうした見方を考え直すきっかけを与えてくれることになったのが、松本信至氏の「西枕」説であった。

さて松本氏のこの説については、筆者のやや個人的な体験を記す形で説明をした方がよいと思われる。一九九八年六月、本学の教養教育科目のゼミで『こころ』を読んでいたとき、その科目の事実上唯一の受講者であった松本信至氏（当時群馬大学教育学部3年生）が、Kの自殺のきっかけとなったのは先生の「西枕」ではなかったか、という趣旨のレポートを提出して来た。松本氏は、Kにとって先生は「一所に向上の道を辿って行きたいと発議」した「同じ求道者」また同志的存在だったはずであり、その先生という「存在があるべきところになかったという喪失感」が先生の「西枕」のためにKの側に生じ、それがその自殺決行の「近因」となったのではないかと指摘<sup>(6)</sup>したのである。

つまりそれは、先生の枕の向きがいつもと逆だったという、そのことのためにそれを見たKが、急に死にたくなかったということなのだろうか。面白いかもしれない、部屋の位置関係などはどうなっていたのだろうか。そう思って調べた結果、玉井敬之氏の作成した、先生とKの下宿していた家の間取り図を手にすることができた(下図<sup>(6)</sup>参照)。これを得たことによって、イメージをかなり具体的なものにすることができた。

(\*) 右図は、玉井敬之『漱石研究への道』桜楓社99頁、による。

なお、玉井氏は「下十一」から「下四十八」の間の多くの本文記述などから、先生とKの下宿していた家の、「台所、女中部屋、便所などを」除いた、間取り図としてこれを作成している。



おそらくKは「土曜の晩」もかなり更けた頃に、四畳の部屋から、八畳との「仕切の襖」を少し開けて、八畳の部屋をのぞいたのである。ところが、「何時も東枕で寝る」先生の、つまりKから見て部屋の奥の方にあるはずの先生の顔が、見当たらなかった。いない、なぜだ、と思ったのではなかったか。だが、よく見回してみると、Kから見て足もとの方に、つまり「西枕に床を敷いた」形で先生は寝ていた。

その後Kは、おそらく四畳の部屋にもどり、「自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから自殺す

る」と、また先生への礼や奥さん（静の母）への詫びの言葉などの他、「もっと早く死ぬべきなのに何故今まで生きていたのだろうかという意味の文句」を、遺書に書く。そして「小さなナイフで頸動脈<sup>けいどうみゃく</sup>を切って」（下一五〇）、八畳間の先生から見て「向う向きに突ッ伏して」、つまり西の方を向いたうつ伏せの形で、死んだのであった。

先生は、「いつも東枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません」と記している。「何時も東枕で寝る」先生が、「その晩に限って、偶然西枕に床を敷いた」ことに、「偶然」以上の意味は何もなかったのだろうか。一体そこに、Kにとってまた先生にとって、どのような「因縁」があり得たのだろうか。そのことを筆者は、本稿で今一度問い直してみたいのである。

それでは以下に、上のような視点を保ちながら、Kの生い立ちからその死に至るまでを、主に先生の手記によってたどり直してみることにしよう。

## 二 郷里でのK

Kと先生は「同郷の縁故」があり、「小供の時から<sup>なかよし</sup>の仲好」（下一一九）であった。また学生の「私」によれば、先生は「新潟県人」（上一一二）であった。とするとKは、新潟の「大變本願寺派の勢力の強い所」の「真宗の坊さんの子」（下一一九）だったということになる。例えばそれは、かつて真宗の開祖親鸞が流されて数年を過ごした地、越後の直江津また高田（現在の<sup>上越市</sup>）の辺りを思い浮かべてもよいだろうか。

Kは「母のない男」であった。Kの父は言うまでもなく「僧侶」であったが、「義理堅い点に於て、<sup>むし</sup>寧ろ<sup>きむらい</sup>武士に似たところがありはしないか」（下一二一）という人であった。Kには「一つ腹から生れた」兄と姉があったが、Kは「寺を嗣いだ兄よりも、他家へ縁づいた……姉を好いて」いた。Kの「小供の時分には、<sup>ままはは</sup>継母よりもこの姉の方が、却って<sup>かえ</sup>本当の母らしく見えた」（下一二二）のでもあったらしい。

「<sup>しんしゅうでら</sup>真宗寺」の「次男」であったKは、「中学にいる時」に「医者の家へ養子に行った」。そしてその「養子先」から「学費を貰って東京へ出て来た」。Kと先生は「同じ下宿」の「同じ間」に入った。二人は「真面目」で、「<sup>しんしゅうでら</sup>実際偉くなる積りでいた」。「ことにKは強かった」。Kは「常に<sup>しやうじん</sup>精進という言葉を使い」、その「<sup>ことごと</sup>行為動作は悉くこの精進の一語で形容されるように」見えた。

「彼の父の感化なのか、又は自分の生れた家、<sup>すなわ</sup>即ち寺という一種特別な建物に属する空気の影響なのか」、Kは「中学にいた頃から、宗教とか哲学とかいうむずかしい問題で」先生を困らせた。「ともかくも彼は普通の坊さんよりは遥かに坊さんらしい性格を有っていたように」見受けられた。「元来Kの養家では彼を医者にする積りで東京へ出した」のだが、「<sup>がんこ</sup>頑固な彼は医者にはならない決心をもって、東京へ出て来た」。たとえ「<sup>まが</sup>養父母を欺むくと同じ事」になっても、「道のためなら、その位の事をしても構わない」とKは言った。先生も「Kの説に賛成し」（下一一九）、二人は「同じ科へ入学」した。

さて郷里においてKは、母のない子であった。実父とは、また兄とも継母とも、親しく睦まじく交わるような関係を、Kは持たなかったようである。唯一の例外は姉であったが、その姉も他家へ嫁ぎ、そしてKも養子に出される。そのような実家に対して、また養子先の医者の家に対しても、あまり帰属意識を持つことなく、Kは上京したのであったろう。このときすでに、彼が頼みとするものは、「精進」に生きいずれば「道」に到達するはずの、自分自身だけであったのかもしれない。

### 三 高校から大学のK

高校一年目の夏、Kは国へ帰らず「駒込のある寺の一間を借りて勉強」していた。「日に何遍も数珠の輪を勘定」しながら、「これ程人の有難がる書物なら読んで見るのが当り前だろう」と言って「聖書」を読み、さらに「機会があったら、コーランも読んで見る積りだ」と言っていた。「彼はモハメッドと剣という言葉に大いなる興味を有っているよう」だった。

高校三年目の夏、Kは「養家先へ手紙を出して、此方から自分の詐を白状してしまった」(下一二十)。「養家」と「実家」の両方の父の激しい怒りを買ったKは、さしあたり「月々に必要な学資」を自分で工面する必要に迫られる。先生は「物質的の補助」をすぐに申し出たが、Kは「一も二もなくそれを跳ね付け」、「夜学校の教師でもする」と言ってその口を探し出して、「今まで通り勉強の手をちっとも緩めずに、新しい荷を脊負って猛進した」。

結局、Kは「実家」に「復籍」することに決したが、事実上「勘当」のような状態となった(下一二十一)。Kを心配するその姉の夫にあてて、先生は、「万一の場合には私がどうでもするから、安心するようにという意味を強い言葉で書き現わし」た手紙を書いた。

Kは、大学一年から二年の中頃まで約一年半「独力で己れを支えて行った」が、その「過度の労力」のために「段々感傷的に」なり、「寧ろ神経衰弱に罹っている位」の状態になって来た。「時によると、自分だけが世の中の不幸を一人で脊負って立っているような事を」言うようになった。先生はKに、「余計な仕事をするのは止せ」と、「当分身体を楽にして遊ぶ方が大きな将来のために得策だと忠告」した。だがKは、「ただ学問が自分の目的ではない」と、「意志の力を養って強い人になるのが自分の考だ」と言うのであった。先生は、そういうKに対し「至極同感であるような様子を見せ」、「自分もそういう点に向って、人生を進む積りだったと遂には明言」した。そして、「Kと一所に住んで、一所に向上の路を辿って行きたいと発議」して、やっとのことでKを、自分の下宿に連れて来たのであった(下一二十二)。

結果的にKは、養家はむろん実家にも自分の帰属すべき場を實際上失うことになった。Kは先生と同様に、事実上故郷喪失者となった。そして先生は、心身に変調をきたしながらも独力で歩み続けようとするKに対し、共に向上の道を歩むべき同志という立場を明言して、Kを自分の下宿へ同居させたのであった。

#### 四 先生の下宿に移ってからのK

先生の下宿に移ったKは、「新しい住居の心持」について「ただ一言悪くないと云っただけ」だった。「仏教の教義で養われた彼は、衣食住についてとかくの贅沢をいうのをあたかも不道德のように考へて」いた。また「昔の高僧だとか聖徒だとかの伝を読んだ彼には、動もすると精神と肉体を切り離れたがる癖が」あった（下一二三）。

Kを「孤独な境遇」から引き出そうと考えた先生は、「蔭へ廻って」下宿の「奥さんと御嬢さんに、なるべくKと話しをする様に」頼んだ。また「自分が中心になって、女二人とKとの連絡をはかる様に」も努め、できるだけ「彼等を接近させようとした」。当初「あんな無駄話をして何処が面白い」と言っていたKも、次第に「女はそう軽蔑すべきものでないと云うような事を」言うようになった。「今まで書物で城壁をきずいてその中に立て籠っていたようなKの心が、段々打ち解けて来る」ように見えた（下一二四～二五）。

「二学年目の試験」の近づいた頃、お嬢さんがKの部屋で二人だけで話をしているのを、先生は一度二度と目撃する。先生はKを散歩に連れ出して、「奥さんや御嬢さんを彼がどう見ているか」を知ろうとした。だがKは、「二人の女に関してよりも、専攻の学科の方に多くの注意を払っている様に」見えた。Kは「シュエデンボルグがどうだとかこうだとか云って」、先生を驚かせた（下一二六～二七）。

大学二年から三年にかけての夏休み、Kと先生は「房州へ」旅に出た。ある日「那古」の「海岸の上に坐って」いたとき、先生は「突然彼の襟首を後からぐいと攫み……こうして海の中へ突き落したらどうする」と言ってKに聞いた。Kはそのままの姿勢で「丁度好い、遣ってくれ」と答えた。Kは、先生の「御嬢さんを愛している素振に全く気が付いていないように」見えた。先生はそれまでも何度もその「自分の心をKに打ち明けよう」としたのだが、ついにそれはできなかった（下一二八～二九）。

「小湊という所」で日蓮ゆかりの「誕生寺という寺」を訪れた後、Kは先生に向ってしきりに「日蓮の事を云々」し出した。それに「取り合わなかった」先生に対し、Kは「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」と言う。胸の中に「御嬢さんの事が蟠まって」いた先生は、Kのその「侮蔑に近い言葉」に対し、「人間らしいという言葉」を使って「弁解を始めた」。では自分のどこが「人間らしくないと云うのか」と聞くKに、先生は「君は人間らしいのだ。或は人間らし過ぎるかも知れないのだ。けれども口の先だけでは人間らしくないような事を云うのだ。又人間らしくないように振舞おうとするのだ」と言った。するとKは、「ただ自分の修養が足りないから、他にはそう見えるかも知れないと答えただけで」、一向に「反駁しよう」としなかった。Kは、「霊のために肉を虐げたり、道のために体を鞭ったりした」「昔の人」を引き合いに出し、自分が「どの位そのために苦しんでいるのか解らないのが、如何にも残念だと明言」した（下一三〇～三一）。

さて先生の下宿に移り、奥さんやお嬢さんと接するようになったKは、たしかにある時点から、お

嬢さんに心をひかれるようになっていたのだろう。だが、お嬢さんに心ひかれるというそのことは、Kにとって「精神的に向上心がないもの」となることと同義と捉えられることでもあったのだろう。そしておそらくそれは、Kがその生涯をかけて来た「道」への「精進」に背くものでもあった。「君は人間らしい……けれども……人間らしくないように振舞おうとする」という先生の指摘は、Kの抱えつつあったそうした矛盾とも言えるものを、たしかに言い当てていた可能性がある。さらに言えば、那古の海岸でKがもらした「丁度<sup>いい</sup>、遣<sup>い</sup>ってくれ」という言葉も、自らの内に自覚されつつあったそうした矛盾の最も過激な解決法としてKの心の中に抱かれていたものが、つい口を突いて出て来てしまったものであったのかもしれない。

## 五 Kによる恋の自白

大学の三学年目が始まった「十月の中頃」、先生はお嬢さんがKの部屋で談笑しているのを聞く。「そのうち御嬢さんの態度がだんだん平気になって」来て、そうしたこと、つまりお嬢さんがKの部屋に来てKと二人だけで話をするということが、よくあるようになった。「十一月の寒い雨の降る日の事」、先生は「どろどろ」になった坂の往来で、連れ立って歩いて来るKとお嬢さんに出くわした。さらに「年が暮れて」、迎えた正月のある晩、Kと先生は奥さんとお嬢さんから「百人一首」に引っ張り出される。そのときお嬢さんは、「眼に立つようにKの加勢をし出し……仕舞には二人が殆んど組になって」先生に当るといふ有様にまでなった（下―三十二～三十五）。

それから二三日後、奥さんとお嬢さんが家を留守にしたある日、Kは先生の部屋にやって来て、「何時にも似合わない」「奥さんと御嬢さんの話」を始め、なかなかそれを止めようとしなかった。「何故今日に限ってそんな事ばかり云うのか」と尋ねる先生に対し、突然黙ったKは、ついに「彼の御嬢さんに対する切ない恋を打ち明け」た。

このKによる恋の自白の直後のことを、先生は次のように記述している。やや長くなるが、問題の箇所なのでそのままに引用してみたい。

その時の私は恐ろしさの塊りと云いましょうか、又は苦しさの塊りと云いましょうか、何しろ一つの塊りでした。石か鉄のように頭から足の先までが急に固くなったのです。呼吸をする弾力性さえ失われた位に堅くなったのです。幸いな事にその状態は長く続きませんでした。私は一瞬間の<sup>のち</sup>後に、また人間らしい気分を取り戻しました。そうして、すぐ失策<sup>しま</sup>ったと思いました。先を越されたなと思いました。

然しその先をどうしようという分別はまるで起りません。恐らく起るだけの余裕がなかったのでしょう。私は腋<sup>わき</sup>の下から出る気味のわるい汗が襦袢<sup>じゅばん</sup>にしみ透るのを凝<sup>じっ</sup>と我慢して動かずにいました。Kはその間<sup>あいだ</sup>何時もの通り重い口を切っては、ぼつりぼつりと自分の心を打ち明けて行きます。私は苦しくって堪<sup>たま</sup>りませんでした。恐らくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上

に判然<sup>はつき</sup>りした字で貼<sup>は</sup>り付けてあったろうと私は思うのです。いくらKでも其所に気の付かない筈はないのですが、彼は又彼で、自分の事に一切を集中しているから、私の表情などに注意する暇がなかったのでしょう。彼の自白は最初から最後まで同じ調子で貫ぬいていました。重くて鈍<sup>のろ</sup>い代りに、とても容易な事では動かせないという感じを私に与えたのです。私の心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようという念に絶えず掻き乱されていましたから、細かい点になると殆んど耳へ入らないと同様でしたが、それでも彼の口に出す言葉の調子だけは強く胸に響きました。そのために私は前いった苦痛ばかりでなく、ときには一種の恐ろしさを感じることになったのです。つまり相手は自分より強いのだという恐怖の念が萌<sup>も</sup>し始めたのです。(下一三六)

さて、このときKは「ぼつりぼつりと」何を打ち明けたのであったろう。ここから、Kがお嬢さんへの「切ない恋」におちたことは分かる。しかし、一体それがどのような「恋」であり、それはKの生涯の信条だった「道」への「精進」とはどう関わるのか、またKはその「恋」をどうしたいというのか、そういったことは全く伝わらないのである。そうしたことはKによって語られなかったのか、あるいは語られていたのだが、先生にとっては「殆んど耳へ入らないと同様」のことだったのだろうか。

いや、Kがここでそうしたことを全く語らなかったなどということが、あり得るだろうか。Kが、自らのおちた「恋」について告白するときに、それが彼の生涯をかけて来た「道」への「精進」とどのように関わるのか、また彼はその「恋」を實際上どう扱うつもりなのか、そういったことに全くふれないなどということは、あり得ないと考えるべきではないだろうか。Kはそれらのことについてもたしかに語った、しかしそれは先生の耳には入らなかった、というのが事の真相に近いのではないかと筆者は考える。

Kはここで、自らが「恋」におちたことは、その生涯をかけて来た「道」への「精進」に背くものであると、認めたのではなかったろうか。しかしだからと言って、「道」を捨てて「恋」に進むべきだとは、「道」を捨てられるとは、彼には思えていなかったろう。Kはこのとき、実際に「恋」に進んでそれをお嬢さんに打ち明けるといった考えのないことを、先生に告げたのではないだろうか。むしろKは、自分が「恋」におちたということ、他のすべてのものを捨てさせようとする「恋」という世界に自分がたしかにひかれているということ、そのことへの驚きと戸惑いを、先生に語ったのではなかったろうか。<sup>(7)</sup>

つまりKはここで、自らの「恋」について、それが「道」への「精進」と矛盾すること、またそれをどうしたいという当てのあるものではないこと、をたしかに語った。だがそれらは、ほとんど先生の耳に入らなかった。そういう想定に立ちたいと、筆者は考える。



## 六 すれ違いの対話

Kによる「恋」の告白のあった日の深夜、先生は「襖ごしに」Kに、「今朝……<sup>[君から]</sup>聞いた事に就いて、もっと詳しい話をしたいが……<sup>[君の]</sup>都合はどうだ」と尋ねる。Kは、「そうだなあと低い声で渋って」いた。Kにしてみれば、「もっと詳しい話を」と言われてもあれ以上詳しいものはそうない、といった気持ではなかつたらうか（下—三十八）。

「Kの生返事」は翌日も、その翌日も続いた。また学校が始まったある日、先生は「突然往来でKに肉薄」した。「この間の告白が私だけに限られているか、又は奥さんや御嬢さんにも通じているか」との先生の問いに、Kは「外の人にはまだ誰にも打ち明けていないと明言」した。そして「彼の恋をどう取り扱かう積りか」という問いには、Kは「何も答え」ない。さらに「隠し立てをしてくれるな、凡て思った通りを話してくれ」と言う先生に、Kは「何も……<sup>[君に]</sup>隠す必要はないと判然断言<sup>はっきり</sup>」した。「然し私の知ろうとする点には、一言の返事も与えないのです」と先生はここで記しているが、Kにすれば、あのとき全部話したではないかといった気持ではなかつたらうか（下—三十九）。

その後のある日、Kは「学校の図書館」にいた先生を「上野の公園」へ「引っ張出した」。そこでKは「どう思う」と先生に聞いた。先生が「この際何んで私の批評が必要なのか」と尋ねると、Kは「<sup>しよ</sup>悄然とした口調<sup>ぜん</sup>」で「自分の弱い人間であるのが実際<sup>は</sup>耻<sup>は</sup>ずかしい」と言った。そして「迷っているから自分で自分が分らなくなってしまったので……<sup>[君に]</sup>公平な批評を求めるより外に仕方がない」と言った。「迷う」という言葉の意味を問いただす先生に、Kは「進んで可いか退<sup>しり</sup>ぞいて可いか、それに迷うのだ」と言った。「退ぞこうと思えば退ぞけるのか」と問う先生に、Kはただ「苦しい」と言っただけであった。先生はここで「もし相手が御嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼の都合の好い返事を、その渴き切った顔の上に慈雨の如く注いで遣ったか分かりません」と記している（下—四十）。

しかしこの二人の対話には、すれ違いが生じていないだろうか。先生はここで、Kの言葉がその「恋」のみをめぐって語られている、と思いこんでいるだろう。例えば「進む・退く」という言葉が、お嬢さんへの「恋」に対して「進む」か「退く」かの意味だけで使われている、と思いこんでいるだろう。だからこそ、「もし相手が御嬢さんでなかったならば……」と記せるのだろう。だがそこには誤解が生じていないだろうか。

「道」への「精進」に生きて来たKが、自分が「恋」におちたと自覚してそれについて考えるとき、それを「道」と全く切り離して考えるということは、あり得ないだろう。Kは、「恋」と共に常に「道」のことを考えていたであろう。例えばこの「進む・退く」という言葉も、お嬢さんへの「恋」に対してだけでなく、自らの生涯をかけて来た「道」に対して「進む」か「退く」かという意味でも、使っていたと見るべきであろう。Kはここで、自分が「道」から退けるか、逆に「恋」から退いて「道」にもどれるのか、それを考えると「苦しい」、そう言っていたのではないだろうか。

「Kが理想と現実との間に彷徨<sup>ほうこう</sup>してふらふらしているのを発見した」先生は、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放ち、「その一言<sup>いちごん</sup>でKの前に横たわる恋の行手を塞ごうとした」。

Kは「真宗寺に生れた男」だったが、「男女なんによに関係した点」においては「彼の傾向は……決して生家の宗旨に近いものではなかった」。Kの「精進という言葉」に「禁欲という意味も籠っている」のはもちろんのこと、「道のためには凡てを犠牲にすべきものだ」と云うのが彼の第一信条であり、「たときい慾を離れた恋そのものでも道の妨害きまたげになる」というのがKの主張であった。

先生は「精神的に……」の一言で、「彼が折角積み上げた過去を……今まで通り積み重ねて行かせようとした」のであった。先生はもう一度、「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」とくり返した。するとKは、「馬鹿だ」とやがて答え、「僕は馬鹿だ」とくり返した（下一四十一）。

この二人のやり取りにも、微妙なすれ違いがあるように思う。まず先生は、「精神的に……」という言葉を持ち出すことによって、先生なりに話の主題を「恋」から「道」へと転換させようとしたのであったろう。そうしてKに、「恋」に陥った所から「道」への「精進」という以前の生き方に立ち帰らせようとした。「恋」などという「馬鹿」な営みを断念させ、「道」への「精進」という今まで通りの生き方にもどらせようとした、もどらせることができると考えたのであったろう。

だがこれに対しKは、先生のこうした反応を、つまり「策略」としてではなく「批評」ないし忠告としてのそれを、半ばは予想していたのではないだろうか。というのもおそらくKは、自分が「道の妨害きまたげ」たる「恋そのもの」に陥って動けずにいることを自覚していただろうし、しかももしそこから動くとするれば、「恋」を捨てて「道」にもどるしか自分にはないはずだという判断も、持っていたであろうからである。そう判断しながら、しかしそのように動けずにいる自分は、たしかに「馬鹿」であると、Kは無二の親友の言葉によって確認したのではなかったろうか。つまりそれは、初めて気づかされたとか、忘れていたことを思い出させられたといったことではなく、自分でも半ば予想していたことを、先生の言葉によって駄目押しされたという感じではなかったか、と筆者は考える。

しばらくするとKは、「もうその話は止めよう」と言った。さらに「止めてくれ」と「今度は頼むように」言い直した。先生はこれに、「止めてくれって、僕が云い出した事じゃない、もともと君の方から持ち出した話じゃないか。然し君が止めたければ、止めても可いが、ただ口の先で止めたって仕方があるまい。君の心でそれを止めるだけの覚悟がなければ。一体君は君の平生の主張をどうする積りなのか」と言った。するとKは、突然「覚悟？」と聞き、そうして「覚悟、——覚悟ならない事もない」とつけ加えた（下一四十二）。

先生はここで、Kの「恋」を止めさせようとして、Kにその「恋」を「止めるだけの覚悟」があるかと問うたのだろう。そして、「君の平生の主張」という形で改めてKの「道」への「精進」を持ち出し、Kをそちら側へいわば追い返すための駄目を押そうとしたのであったろう。

だがおそらくKは、自分が「恋」と「道」という矛盾する二つのものの中で動けずにいると自覚していた。自分に「道」が捨てられるはずはない。だが、「恋」を止めて「道」にもどることも自分にはできずにいる。Kはこのとき、「恋」と「道」のどちらかを捨ててどちらか一方に進むということが、自分にはついにできないかもしれないと予感したのではなかったか。そう予感したKは、そのようにしかあり得ないかもしれない自己のあり方・生き方を、生きることそのものを「止める」ことによ

て、「止めるだけの覚悟」のあることを、ここで確認し、そしてそれを「覚悟、——覚悟ならない事もない」という言葉として、口に出したのではなかったろうか。

那古の海岸での「丁度<sup>いい</sup>、遣<sup>い</sup>ってくれ」という言葉が、Kの自死への暗示といった程度の意味を持っていたとすれば、ここの「覚悟、——覚悟ならない事もない」という言葉は、Kによる自死の決意表明という程度の意味を持つものであったと見ることができよう。だがそれは、対話の相手である先生には、全く伝わっていなかったのである。

## 七 自死の決行

Kには「投げ出す事の出来ない程<sup>たつ</sup>尊<sup>ん</sup>とい過去があった」。「彼はそのために今日<sup>こんにち</sup>まで生きて来た<sup>こ</sup>と云つても可<sup>い</sup>位」であった。「前後を忘れる程の衝動<sup>い</sup>が起る機会を彼に与えない以上、Kはどうしても一寸踏み留<sup>い</sup>まって自分の過去を振り返らなければならなかった」。「そうすると過去が指し示<sup>い</sup>す路を今まで通り歩かなければならなくなる」はずであった。

「上野から帰った晩」、先生の「眼には勝利の色が多少輝いて」、先生の「声にはたしかに得意の響があった」。「程なく穏やかな眠に」おちた先生は、突然自分の「名を呼ぶ声で眼を覚まし」、Kの部屋との「間の襖<sup>あいだ ふすま</sup>が二尺ばかり開いて、其所にKの黒い影が立<sup>あ</sup>って」いるのを見る。Kは「もう寐<sup>ね</sup>たのか」と聞き、先生は「何か用か」と聞き返した。Kは「大した用でもない、ただもう寐<sup>ね</sup>たか、まだ起きてるかと思って、便所へ行<sup>ついで</sup>った序に聞いて見ただけだ」と答えた。翌朝、前夜のことを夢かとも思った先生に、Kはたしかに襖を開けて先生を呼んだと言う。「何故そんな事をしたのか」との問いには、「別に判然<sup>はっきり</sup>した返事も」せず、「調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡が出来<sup>い</sup>るのかと却<sup>かえ</sup>って」先生に尋ねて来た。さらに先生が「あの事件に付いて何か話す積りではなかったのか」と問うと、Kは「そうではないと強い調子で」言い切った（下一四十三）。

先生はこの晩、Kを「恋」から退かせることに、同時に「道」にもどらせることに成功したと、一時的にせよ思ったのだろう。一方Kはその夜、直接「あの事件に付いて」ではないが「何か話す積りではなかったのか」。あるいはそれは、一般論として「恋」と「道」の矛盾はどう解決されるべきなのか、さらにはそうした矛盾が先生には直接の問題として存在していないのか、といったような問いではなかったかと筆者は考えている。しかしKは、そうしたたぐいのことをここで口に出さなかった。そしてそのことが、つまりここでのKの沈黙が、逆に先生に疑心暗鬼を生じさせることになった。

先生は次に、Kの「覚悟」という言葉を、「ただKが御嬢さんに対して進んで行くという意味に」解釈し直す。「果<sup>すなわ</sup>断に富んだ彼の性格が、恋の方面に発揮されるのが即ち彼の覚悟だろうと一<sup>い</sup>図に思い込んで」しまう。そしてKに先んずるべく、「Kのいない時、又御嬢さんの留守な折を待<sup>い</sup>って、奥さんに談判を開こう」とする。「一週間の後<sup>のち</sup>」、ついに「仮病」を使ってその機会を得た先生は、それを実行に移す。「話は簡単でかつ明瞭に片付いて」しまった（下一四十四～四十五）。

だが先生は、事をそのように運んだことをKに打ち明けることができず、そのために苦しむことに

なる。Kにも打ち明けられず、また奥さんにすべてのことを打ち明けることもできないまま「五六日経った後」、先生は奥さんから、お嬢さんとの結婚話をKに告げたと知らされる。そのときKは、「変な顔をして」、「そうですか」と言い、奥さんに「あなたも喜んで下さい」と言われてはじめて「御目出とう御座います」と言い、さらに茶の間を出ようとする前に「結婚は何時ですか」と聞き、それから「何か御祝いを上げたいが、私には金がないから上げる事が出来ません」と言ったという(下一四十六～四十七)。

「奥さんがKに話をしてからもう二日余り」になっていた。その間Kは先生に対して「少しも以前と異なった様子を見せなかったのです」、先生は「全くそれに気が付かずにいた」。「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」と感じた先生が、「一人で顔を赧らめ」ながら、「ともかくも翌日まで待とうと決心した……土曜の晩」に、「Kは自殺して死んでしまった」のであった(下一四十八)。

上野から帰った夜の翌日から約一週間後、先生は奥さんに「談判」を開いた。奥さんはその三四日後、Kに先生とお嬢さんの結婚話を告げたようである。その二三日後に、先生は奥さんからKにその話をしたと知らされ、さらにもう一日待とうと先生が決心した「土曜の晩」に、Kは自殺した。このおよそ二週間の間、Kは何を考えていたのか、あるいは彼はどのようにしてまたなぜ自死の決行を決意し、実際にそれを実行したのであったか。それらのことを、先生の手記はほとんど伝えていない。我々は我々に可能な限りで、推測を試みる他はない。まず奥さんから先生とお嬢さんの結婚話を知らされるまでの間、Kは何をどのように考えていたか、筆者の推測は次のようなものである。

Kには、彼の中での「恋」と「道」の矛盾という問題は解決できなかったであろう。むしろ論理的にははっきりしていたとも言える。Kの論理では、「道のためには凡てを犠牲にすべき」なのだから、「恋」は「道」のために捨てられるべきなのである。だが実際にはそれができない。逆に「恋」の方が、自分に「道」を捨てさせようとする。そういう「恋」の力に屈してしまいそうな自分は弱い人間である。弱い人間であることを克服して強い人間になるには、「道」にもどらなければならない。だがそれができそうもない。Kの思考は、こういった辺りの所を堂々めぐりしていたのではなかったろうか。

あるいはKは、昔郷里で親しんだ「生家の宗旨」としての親鸞の妻帯の論理を思い起こしもしたかもしれない。だがそれも、Kの採り得る道とは思えなかったであろう。「投げ出す事の出来ない程尊とい過去」が、彼にそれを許さなかったであろう。その意味では、Kの「御嬢さんに対する切ない恋」は、彼に「前後を忘れさせる程の衝動」として働くものではなかったとも言えることができる。

「恋」と「道」の矛盾の中ですますます動くことの困難になったKにとって、上野でのあのときに抱かれた「覚悟」—自死の決意の実行の方が、むしろ容易と見えることもあったであろう。それは、そうした矛盾の過激ではあるが実践的な解決法として捉えられてもいたであろう。だがそうは言っても、その実際の実行にはなおためらいがあったであろうし、またそこに、単に矛盾の解消というだけでなく、何がしかの積極的な意味を見出したいという思いもあったであろう。

Kは、「一所に住んで、一所に向上の路を辿って行きたいと発議」して自分をこの下宿に連れて来た

先生に、K自身の「恋」をどうするのかではなく、一般論として「恋」と「道」の矛盾はどう解かれるべきか、また先生にはそれは直接の切実な問題となっていないのか、といったことを問うてみたいと考えていたのではなからうか。あるいは上野から帰った晩、そうしたことを問おうとしながらも、なおためらってKはそれを口に出さなかったのではなかったか。そしてその後、そうしたことを口にする機会を見出すことができないでいたときに、Kは奥さんから先生とお嬢さんの結婚話を聞かされたのではなかったらうか。

Kは失恋した。だが、もともとどうしたいという当てのある「恋」ではなかったはずだろうから、お嬢さんに失恋したということ自体は、そうひどくこたえるということは、なかったのではないだろうか。むしろ不可解なのは、事をそのように運びかつ今もKに対して沈黙している先生の言動の方であっただろう。

なぜ先生は自分に打ち明けられないのか、そもそもなぜ彼はお嬢さんとの恋に、結婚に踏み出せたのか。だがそのように問う中で、Kは、実は先生にとって「道」と「恋」は矛盾するものではなかったこと、そもそも「一所に向上の路を<sup>たど</sup>って<sup>ゆ</sup>りたい」という言葉は先生の真意ではなかったこと、に気づいたのではなかったらうか。先生は共に「向上の路」を進むべき同志ではなかった。とすればやはり自分は、一人で「道」への「精進」に立ちもどるべきである。論理的には、そう結論されるしかなかったであろう。だが一度「道」に背いたと自覚するKに、そのことの実践はやはりひどく困難とも思われたらう。それよりはむしろ、上野でのあのときに抱かれた「覚悟」—自死の決行の方が容易とも思われたであろう。だが死ぬことに、何か積極的な意味があるのか、依然として疑問でもあったらう。Kは、およそ以上のような思い<sup>(8)</sup>にゆれる中で、自死する「土曜の晩」を迎えることになったのではなかったらうか。

あるいはKは、どのような形にもせよ先生とも決別する覚悟の上で、あの「土曜の晩」、四畳と八畳の間の襖を開けたのではなかったらうか。Kは、かつては同志とも考えた先生から、「道」と「恋」の矛盾の問題にせよ死の意味についてにせよ、最後に何か一言引き出せないかと考えて、先生の名を呼ぼうとしたのではなかったか。ところが、いつもいるはずの場所に先生はいなかった。いつもあるはずの所に、先生の顔がなかった。だが、よく見回すと、Kから見て足もとの方に、いつもと逆の「西枕」の向きで先生は寝ていた。そして、それが「西」の方向であることに気づいたとき、Kは、「生家の宗旨」すなわち真宗の教義の説く「西方極楽浄土」への往生を、思い起こしたのではなかったらうか。さらに同時にKは、おそらくは幼時に死別した亡き母への激しい思慕の念にも、捕われたのではなかったか。Kはそこで、ほとんど突発的とも言える短時間に、「西」の方角に向っての自死を決意<sup>(9)</sup>した。Kは直ちに自室にもどり遺書をしたためた上で、「小さなナイフで頸動脈<sup>けいどうみゃく</sup>を切って」西の方を向いたうつ伏せの形で死んだ。筆者はKの死をこのように推測する。

## 八 生家の宗旨に殉じた？

さて、自殺したKがその遺書の中で、西方浄土にもまた亡母にもふれなかったのは、さらにはお嬢さんの名前を記すことを回避したのも、彼なりの自分の「過去」に対するいわばいたわりのためだったのではないかと筆者は考える。それらのことにふれるのは、「そのために今日まで生きて来た」と云っても「可い位」な彼の「尊とい過去」を、あからさまに否定することになると思われたから、Kはそれらにふれなかったのではなからうか。また「もっと早く死ぬべきなのに何故今まで生きていたのだろう」という意味の文句は、西方浄土や亡母への追慕の念に出会うまで自死を執行できなかった自分の「弱さ」への悔恨から、発せられた言葉ではなかつたらうか。

さてそれではKの死は、彼の「生家の宗旨」すなわち真宗の教義に殉じたものだったと見てよいのか。この点では、浄土真宗の教義について門外漢である筆者に、軽々に断定することはできない。ただKはそれまで、浄土真宗でよく説かれる「他力」的な信仰の持ち主としては生きて来なかった、と見ることはできるように思う。

例えばここで、親鸞の語録として有名な『歎異抄』の第三条を引いてみよう。

善人<sup>ぜんじん</sup>なをもて往生をとぐ、いはんや悪人<sup>あくにん</sup>をや。しかるを世のひとつねにいはいく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと。この条一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣<sup>いしゆ</sup>にそむけり。そのゆへは、自力作善<sup>じりきさぜん</sup>のひとは、ひとへに他力をたのむこゝろかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこゝろをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土<sup>しんじつほうど</sup>の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死<sup>しやうじ</sup>をはなることあるべからざるをあはれみたまひて、願ををこしたまふ本意<sup>ほんい</sup>、悪人成仏<sup>じやうぶつ</sup>のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因<sup>しやういん</sup>なり。よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、おほせさふらひき。<sup>(10)</sup>

「悪人正機」の教えを説いた箇所としてよく知られている所だが、ここに説かれているような意味での「悪人」でも、また「他力」を頼む人でも、Kはなかつたと言つてよいだらう。Kは少なくともその死の直前に至るまで、むしろここで言う「自力作善」を志して、その「道」への「精進」に生きて来たと言ふべきであらう。あの「養父母を欺むく」ことにしても、その人生の目的たる「道」のために「善」きこととして選ばれていたはずである。

その意味ではKの死を、その「生家の宗旨」たる真宗の教義に殉じたものと見ることに、無理があると言ふべきかもしれない。「男女に関係した点」においてKの「傾向」は「決して生家の宗旨に近いものではなかつた」という先生の指摘を、ここでも思い起こしておくべきなのかもしれない。

ただ微妙に問題だと思われるのは、Kのお嬢さんへの「恋」と、そして筆者の推測が正しいとすればその死の間際の亡母への追慕の情念である。Kにとって「恋」は、そしておそらくは亡母への思慕

も、自身の「弱さ」と捉えられるものであったろうし、強く取ればそれは、彼にとって「悪」しきこととも捉えられ得るものだったと思われる。だがそうした「恋」や情念への捕われが、自身の力ではいかんともなし難いやむを得ないものなのだという思いに、もしKが出会えていたならば、ひょっとして「小さなナイフ」を自分の首に立てたまさにその一刹那に、阿弥陀仏の「他力」へのゆだねという形での真宗の教義への信が、Kにもあり得たかもしれないとも筆者は考える。

しかしいずれにしても、その自死の決行も含めてそこに至るまでのKの行動は、一貫して「自力」的だったと言ってよいだろう。Kは「聖書」を読み、また「コーランも読んで見る積りだ」と言い、「モハメッドと剣という言葉に大なる興味を」持っていた。「昔の高僧だとか聖徒だとかの伝」を読み、「シュエデンボルグ」や「日蓮」についても彼は云々していた。

漱石『行人』の中に、主人公一郎の友人Hさんによる「モハメッドに就いて伝えられた<sup>しも</sup>のような物語」というものが、次のように記されている。

……モハメッドは向うに見える大きな山を、自分の足元へ呼び寄せて見せるというのだそうです。それを見たいものは何月何日を期して何処へ集まれというのだそうです。……

期日になって幾多の群衆が彼の周囲を取巻いた時、モハメッドは約束通り大きな声を出して、向うの山に此方へ来いと命令しました。ところが山は少しも動き出しません。モハメッドは澄ましたもので、又同じ号令を掛けました。それでも山は依然として凝<sup>じっ</sup>としていました。モハメッドはとうとう三度号令を繰返さなければならなくなりました。然し三度云っても、動く気色の見えない山を眺めた時、彼は群衆に向って云いました。——「約束通り自分は山を呼び寄せた。然し山の方では来たくないようである。山が来て呉れない以上は、自分が行くより外に仕方があるまい」。彼はそう云って、すたすた山の方へ歩いて行ったそうです。

この話を讀んだ当時の私はまだ若う御座いました。私はいい滑稽<sup>こっけい</sup>の材料を得た積で、それを方々へ持って廻りました。するとその内に一人の先輩がありました。みんなが笑うのに、その先輩だけは「ああ結構な話だ。宗教の本義は其処にある。それで尽している」と云いました。私は解らぬながらも、その言葉に耳を傾けました。（『塵勞』三十九～四十）<sup>(11)</sup>

宗教を、神秘的な超能力などといったものの備わらない一個のただの人間の営みとして見るとするならば、これはたしかに「宗教の本義は其処にある。それで尽している」とうなずける話であるように思う。そしてこの「自分が行くより外に仕方があるまい」と言って「山の方へ歩いて行った」という「モハメッド」の言動は、あくまでも「自力」的であり続けたであろう一人の宗教者の印象として、『こころ』のKの持っていた雰囲気はどこか通じるものがあるように筆者は思う。

そもそも浄土系の仏教・浄土教の信仰では、いわゆる鎌倉新仏教の法然・親鸞以後とくに「他力」ということが強調されることになった。だがそれ以前の平安期には、もちろん様々な形態の浄土信仰が見られたのである。そこには、後世から見れば極めて「自力」的とも言える信仰の形もあった。管

見の及び得ているそうしたものの一例を、次に紹介してみたい。

## 九 源大夫の説話

平安時代後期、院政期の初め頃の成立かとされる『今昔物語集』の卷十九第十四話は、次のような話を伝えている。かなり長くなるが、本書の考察と関連しても、また少しくそれと離れるとしても、興味深い説話と思われるので、丁寧に追ってみることにしたい。

「讃岐国、多度の郡」に、「源大夫といふ者」がいた。「心極めて猛くして、殺生をもちて業とす。日夜朝暮に山野に行きて鹿鳥を狩り、河海に臨みて魚を捕る」という暮しをしていた。「人の頸を切り、足手を折らざる日は少く」、また「因果を知らずして三宝を信ぜず。いかにいはんや、法師といはむ者をば故に忌みて、当りにも寄せざりけり」という男であった。そのように「悪しくあさましき悪人」として、人々に恐れられていた。

そんな源大夫がある日、「郎等四五人ばかり」を連れて山で狩をした帰り道、「堂」に人が多く集まっているのを見る。「これは何事する所ぞ」との源大夫の問いに、郎等が「これは堂なり。講を行ふにこそ待るめれ。講を行ふといふは仏教を供養することなり。あはれにたふとく侍ることなり」と答える。源大夫は「さるわざをする者ありとは、ほのかに時々聞きけれども、かく目近くは見ざりつ。いかなることをいふぞと、いざや行きて聞かむ。暫く留まれ」と言って馬から降り、堂の中へ入って行った。

その「講の庭に」いた人々の「恐ぢ騒ぐ」中を押し分けるように進んで行った源大夫は、「高座」にいた「講師」のわきに坐ると、「講師はいかなることをいひたるぞ。わが心に現にと思はむばかりのことをいひ聞かせよ。さらずば便なかりなむものぞ」と言って、差していた「刀を押し廻し」た。「恐しく」思いながらも「仏助けたまへ、と念じ」た講師は、「これより西に多くの世界を過ぎて仏在します。阿弥陀仏と申す。その仏、心広くして、年ごろ罪を造り積みたる人なりとも、思ひ返して一度阿弥陀仏と申しつれば、必ずその人を迎へて、楽しくめでたき国に、思ひと思ふこと叶ふ身と生れて、遂には仏となむなる」と答えた。

源大夫は「その仏は人をあはれびたまひてば、われをも憎みたまはじなむ」と言い、「さなり」と言う講師に、「さらば、われその仏の名を呼びたてまつらむに、答へたまひてんや」と問う。講師は、「それを實の心を至して呼びたてまつらば、などか答へたまはざらむ」と答えた。源大夫はさらに「その仏はいかなる人をよしとはのたまふぞ」と問い、講師は「人の、他人よりは子をあはれと思ふごとくに、仏も誰をも憎しとおぼさねども、御弟子になりたるをば、いま少し思ひたまふなり」と答える。源大夫の「いかなるを弟子とはいふぞ」との問いに、講師は「今日の講師のやうに、頭を剃りたる者はみな仏の御弟子なり。男も女も御弟子なれども、なほ頭を剃れば増ることなり」と答えた。

これを聞いた源大夫は、「さは、わがこの頭剃れ」と言う。講師が、「あはれにたふときことにあれども、只今俄かにいかでかその御頭をば剃らむ。実におぼすことならば、家に返りて妻子眷族などにいひ合せて、方をしたためて剃りたまふべき」と答えると、源大夫は、「なんぢ仏の御弟子と名乗りて、



仏は虚言そらごとなきといひて、御弟子になりたる人をあはれとおぼすといひて、いかにたちま舌を返して、後に剃れとはいふぞ。いと当らぬことなり」と言い、「刀をば抜きて自らもとどり髻ねざはを根際より切」ってしまった。

この事態に人々も騒ぎ出し、外にいた郎等達も「わが君はいかなることのおはするぞ」と言って入って来た。だが源大夫は大声で郎等達を制し、「なんぢ等は、わがよき身とならむとするを、いかに思ひて妨げむとはするぞ。今朝までは、なんぢ等がある上にもなほ人をもがなと思ひつれども、これより後は速すみやかにのおの行かむと思はむ方に行き、つかはれむと思はむ人につかはれて、一人もわれには副そふべからず」と言った。

源大夫は直ちに湯をわかして「自ら頭を洗ひ」、講師に向つて「これ剃れ。剃らずば悪しかりなむ」と言う。「実まことにかくばかり思ひ取りたらむことを、剃らずば悪しくもありなむ、また出家を妨げばその罪ありなむ」と思った講師は、源大夫の「頭を剃りて戒を授け」た。

その後「衣ころも、袈裟けきうは直しく着て、金鼓こんぐを頸くびに懸け」た源大夫は、「われはこれより西に向ひて、阿弥陀仏を呼びたてまつりて金かねを叩きて、答へたまはむ所まで行かむとす。答へたまはざらむ限りは、野山にまれ、海河にまれ、更に返るまじ。ただ向きたらむ方に行くべきなり」と言って、声を高く「阿弥陀仏よや、おいおい」とあげて、金を叩きながら、西に向つて歩き出した。

「西に向ひて、阿弥陀仏を呼びたてまつりて叩きつつ行く」源大夫は、「深かはき水とても浅き所を求めず、高き峯とても廻りたる道を尋ねずして、倒れまろびて向きたるままに」ひたすら西に向つて進んで行った。「日暮れて、寺のあるに行き着」いた源大夫は、その寺の「住持の僧」に、「われかく思ひを発して西に向ひて行くに、喬平そばひらを見ず。いはむや、後を見返らずして、これより西に高き峯を超えて行かむとす。いま七日ありて、わがあらむ所に必ず尋ねて来れ。草を結びつつぞ行かむとする。それを見て注しるしとして来るべし。もし食ふべき物やある。夢ばかり得しめよ」と言った。「干飯ほしいひ」を与えられた源大夫はそれを「多し」と言い、「ただ少しを紙につつみて腰はさに挟み」、住持の「既に夜に入りぬ。今夜ばかりは留まれ」との言葉にも耳を貸さず、その寺を立った。

七日後、住持は源大夫の言葉の通り、彼の結んだ草のあとをたどつて「高き峯を超え」た。すると「またそれよりも高く峻けはしき峯」があった。その峯に登ると、「西に海現あらはに見ゆる所」があった。そしてそこに「二股ふたまたなる木」があり、源大夫はその木にまたがって、「阿弥陀仏よや、おいおい」と呼んでいた。源大夫は住持を見、喜んで「われなほこれより西にも行きて、海にも入りなむと思ひしかども、ここにて阿弥陀仏の答へたまへば、それを呼びたてまつりゐたるなり」と言った。驚いた住持が「いかに答へたまふぞ」と問うと、源大夫は「さは呼びたてまつらむ。聞け」と言い、「阿弥陀仏よや、おいおい。いづこにおはします」と叫んだ。すると「海の中に微妙みみゆうの御音ごこゑ」があり、「ここにあり」と答えた。住持はこれを聞いて「悲しくてたふとくて、臥ふしまろび泣くこと限りなし」という有様となった。源大夫も涙を流しながら、「なんぢ速すみやかに返るべし。いま七日ありて、来てわが有様を見畢はてよ」と言った。「物や欲しきと思ひて、干飯ほしいひを取りて持たりき」と言う住持に、源大夫は「更に物欲しきことなくして、未だあり」と答えた。たしかにこの前と同じように「腰はさに挟みて」あった。

さらに七日後、住持が再び行って見ると、源大夫は「前のごとく木の股に西に向ひて、この度は死たびにて」いた。そしてその口からは「微妙みみやうの鮮あざやかなる蓮華いちえふ一葉」が生えていたという。話末にさらに、「必ず極楽に往生したる人にこそあめれ」と、あるいは「定めて罪人には非ずとおぼゆ」などと付されている<sup>(12)</sup>。

さてこの話の中で、源大夫はそもそも「法師」とも「仏教」ともほとんど無縁な存在であった。そして彼は、自他共に認める「悪しくあさましき悪人」であった。そんな源大夫が、たまたま聞いた、おそらくはちょっとした好奇心で立ち寄ったお堂での「講師」の話の中の、「阿弥陀仏」に向けて発心することになった。なぜであったろう。

「あさましき悪人」と自他共に認めていた源大夫は、おそらく自らが「悪人」であることを心から受け入れていたであろう。であるからこそ逆に、もしここで、そのように「悪人」であることを止めよといった趣旨の他者からの教説にふれていたら、直ちにそれを拒絶することができたであろう。ところが、そこで耳にしたのは、「年ごろ罪を造り積みたる人なりとも……必ずその人を迎へて……遂には仏となむなる」という「阿弥陀仏」の言説であった。このとき源大夫は、自他共に認める「悪人」としての自分をそのままに受け入れようとする他者の言葉と、初めて出会ったのではなかったろうか。ここで源大夫の発した「その仏は……われをも憎みたまはじなむ」とは、「悪人」である自己をそのままに受け入れようという「阿弥陀仏」との初めての出会いに向けて、心からの驚きと共に発せられた言葉であったように思われる。

いわゆる内的な形の「信」、「阿弥陀仏」の「他力」への信仰としては、これで尽きている。『行人』の表現を借りれば、「宗教の本義は……それで尽くしている」。そのようにも、後世の目からすれば見える所ではある。だが源大夫は、その「信」に対する「阿弥陀仏」の確かな応答を求めて、「自力」でひたすら「西」へと向かい「阿弥陀仏」を呼び続けて、ついに「西」の地の果てで「阿弥陀仏」の「音こゑ」を耳にするに至ったという。筆者はこの説話の源大夫の、「自力」で「阿弥陀仏」を呼びまた自らそこに近づこうとし続けるあり方に、『こころ』のKとどこか通じ合うものがあるように感じられてならないのである。

## 十 先生は何をしたのか

さて、以上のようなKの自死についての筆者の推測を、今一度まとめ直すと次のようになる。Kは、あの「土曜の晩」、自分が失恋もし、唯一の同志を失ったことも確認しながら、それでも一人で「道」への「精進」に立ちもどることができず、また自死の「覚悟」を実行に移すこともできずにいた。そんな自分をいわば持て扱いかねたKは、先生との決別を覚悟しながら、そのかつての同志たる先生から最後に何か一言引き出せないかと考え、八畳の部屋の襖を開けた。するとそこには、いつもとは逆の西向きに床を取った先生がいた。それを見たKは、その「西」の方角への連想から、「生家の宗旨」の説く「西方極楽浄土」への往生を思い起こし、同時にまた亡母への激しい思慕の念に捕われ、ほと

んど突発的に「西」の方角に向っての自死を決意し、直ちに自室へもどってそれを実行した。

もちろんKは、『今昔物語集』の源大夫のように「西」の地の果てまで歩き続けて死に果てたわけではない。だが、彼が「西」向きに「突ッ伏して」死んだことには、彼なりの意味がこめられていたのではないか。あるいはそれは、「恋」と「道」の矛盾を解決できない自分、「道」にもどることのできない「弱い」・「悪い」自分を、そのままに受け入れてくれるであろう存在に向っての死、ということではなかっただろうか。

さてこのように考えてくると、もちろん以上のような考察が妥当性を持つとすればであるのだが、あの晩の先生の「西枕」は、Kにその自死を決行する「きっかけ」を与えることになった可能性があることになる。だとすれば逆に、あの晩、先生が「何時も」の通り「東枕」で寝ていれば、Kが自死を決行することは回避されていたかもしれないわけでもある。そしてその時点での回避が、将来に渡っての自死の回避につながっていたかもしれないとも考えられるのである。

先生はなぜ「その晩に限って、偶然西枕に床を敷いた」のか。いや、「偶然」だと先生の遺書は記している。また、それも「何かの因縁かも知れません」とも記している。先生にとって、それは単なる「偶然」以外の何ものでもあり得なかったのか。本当にそこには、ただの「何かの因縁」以上の意味はなかったのか。あの晩「西枕に床を敷」くにあたって、そのことに、先生はいくらかでもほんの少しでも、意識的でありはしなかったのだろうか。だが、これらの問いはすでに本稿の考察の範囲内ではない。これらについて、さらに再考の機会を持つことができるならば幸いである。

## 注

- (1) 『群馬大学社会情報学部研究論集第6巻』1999年、所収。
- (2) 実は『こころ』については近年、とくに秦恒平・小森陽一両氏の所説をきっかけに活発な論争があった（例えば、1994年2月10日『朝日新聞』夕刊の記事「漱石現象の「明暗」(2)「こころ」論争」がコンパクトにこれを紹介している）。両氏の所説の最大のポイントは、『こころ』の書き手である学生の「私」と先生の奥さんであった静は、現在「結婚」また「共に生きる」生を選び、おそらく子供ももうけて、その中で先生の遺書を伴うこの手記を公表している、と見る点にある（秦氏については『湖の本エッセイ17・漱石「心」の問題』所収「漱石作『こころ』の心見」他を、小森氏については『構造としての語り』新曜社所収「『心』における反転する〈手記〉」他を、参照）。筆者は、両氏の説を刺激的・説得的と思いつつ、しかし全面的には承服し難い点もあり、またその承服し難い点で代案を持ち得ずにいた。その代案とは、学生の「私」は何者でありなぜこの手記を書き得ているか、そして静は現在どういう境涯にあるのか、静と「私」を後に残す形で決意された先生の死はなぜであったのか、さらにはそれに先立つKの死はなぜであったのか、といった一連の問いに答えるべきものであろう。そこで本稿は、それらの問いの内、作品内の時系列的に最も先行するKの死について、筆者なりの代案を提示しようとするものでもある。
- (3) 引用は新潮文庫本による。ただし漢字表記を若干改めた所がある。
- (4) 鶴田欣也「テキストの裂け目」（平川・鶴田編『漱石の『こころ』どう読むか、どう読まれてきたか』新曜社1992年、所収）。
- (5) 平成10年度群馬大学学修原論「日本思想の形成過程Ⅰ」発表レポートによる。
- (6) 玉井敬之「『こころ』二題」（『漱石研究への道』桜楓社1988年、所収）。

- (7) 例えばKはここで、このように語ったのではなかったかという、筆者なりの一つの推測を、以下に記してみたい。

……僕は、お嬢さんへの「恋」におちた……切ない……

……いや、どうしたいという、当てのある「恋」、ではないのだ。

……ただ、「道」とは矛盾する。「道」への「精進」に、背くことは確かだろう。

……もちろん「道」を、捨てられるとは、捨てるべきだとは、思わない。

……だが、「恋」は、他のすべてのものを、捨てさせようとする、それくらいに力のあるものだ、ということを知った。……たぶん、「恋」におちたという、そのこと自体が、「道」から、はずれた、ということなのだろう。

……僕は、「道」にもどれるのだろうか……

……いや、逆に「恋」に進んで、お嬢さんを、専有したいなどと、言っているのではないのだ。……お嬢さんと、結婚したいなどという、当てのある「恋」、ではないのだ。……そんなつもりはないのだ……

……ただ自分が、「恋」におちて、自分の前に、たしかに「恋」という世界が開けているように、見えていて、そしてそこに自分が、たしかにひかれているということ、そのことに、自分でも、ひどく驚いているのだ……

……君は、どうなのだ……

……ひょっとして君も、お嬢さんを……

……いや、すまなかった……

……僕は、弱い……僕は、どうすればいいのだろうか……

単なる憶測に過ぎないではないかという批判は覚悟しながら、筆者は、この推測を、その最初と最後の一行ずつの他は、二～三行ずつくらいが交替で先生の耳に入らなかつたり入ったりした、という想定で試みている。

- (8) ここでのKの思いを独白風の表現にもたらしなれば、例えば次のようなものにならないかと、筆者は考えている。

……とにかくはっきりしたのは、彼もお嬢さんを好きだったということであり、またお嬢さんも彼が好きだったということだ。あるいはそうではないかとも思っていた。……だがなぜ彼は、自分に打ち明けなかったのか、今でも打ち明けないのか。……あるいはなぜ彼は、お嬢さんに向けて行けたのか。……親友たる自分への裏切りではないか、いや、自分への思惑などどうでもよい、「道」への「精進」はどうなるのだ、いや、それは自分の問題か……そうか、「一所に向上の路を辿って行きたい」と言ったあの言葉は、彼の真意ではなかったのだ。「道」は、彼にとってもともと人生の目的ではなかったのだ。……だから彼には、自分のように矛盾として切実な問題とはならなかったのだ。だから彼は、「道」にこだわることなく、「恋」に進めたのだ。……自分は失恋もし、同志も失ったことになる。……しかし、それとても、以前のたった一人の自分にもどただけのこととも言える。……自分はまたたった一人で「道」に進んで行けば……いや、自分は「道」にもどれるのだろうか。いったん「恋そのもの」を味わった自分は、再び「向上の道」を進むことはできないのではないか。……むしろ実践的には、自死への道に踏み出す方が容易に見える。……だが死ぬにしても、そこに積極的な意味はあるのだろうか。……

- (9) これについても、例えば次のような独白風の表現が可能ではないかと、筆者は考えている。

……分からない……どうしたものだろう……だが彼と決別する前に、彼から何かもう一言、引き出せないだろうか。……（そして、襖を開けて八畳をのぞいた。）……いない?!…なぜだ?……（よくよく見回すと）……いた!こんな足もとの方に!……なぜなんだ?!…なぜ、いつもと逆の方を向いているのだ?……いつもと逆の……こちらは、西だ……西……西方……西方極楽浄土……ああ、懐かしい。お母さんも、死んだお母さんも、そこにいと、よく言わ

れたなあ。……死ねば、みんな、そこに行くんだと……。そうだ、それでいいだろう。……今なら、できる。今なら、西に向って、自力で行ける。……自力で、というのが、せめて自分らしい。……自力で、西に向って、死んで行けばいい。……

- (10) 引用は岩波文庫本による。
- (11) 引用は新潮文庫本による。
- (12) 引用は角川文庫本による。ただし漢字表記を若干改めた所がある。